

荀子管見（承前）：論説

著者	啜菽子
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 2
ページ	2 3 - 3 4
発行年	1900-10-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/5029

荀子管見

(承前)

啜菽飲水

倫理政治の一致……………孔子の形式的分子を傳ふ……………孟子と兄弟たり……………
……………政治上の隆禮主義……………分業論……………君主の職ハ一相を論するに在リ……………
立憲政治の萌芽……………後王の説……………覇者を排せず……………韓非子等の先驅……………
……………其文辭……………十二子を嘗る……………比喩……………修辭に意あり……………孟子の文……………
と彼の文……………彼ハ學者なり……………

論

説

前篇に於て余は荀子の倫理學説の由來及び倫理學の根本問題たる善惡の標準に關する彼が所説を畧述せり。乞ふ吾人をして更に眼を轉じて彼が政治に於て抱懷せし學説を窺はしめよ。何となれば、倫理と政治とは前にも述べし如く支那學者の最も重を置し問題にして彼等の著書の多くは此二者の爲めに其大部分を占領せられたればなり。

何れの國に於ても古代にありては倫理學と政治學とは殆ど相一致せるが如く支那に於ても彼等の倫理上の主義は直に又之を政治上の主義と見倣すことを得べし。彼等の見解によれば、身を修むるは家を齊ふる所以也、家を齊ふるは國を治むる所以也、修身と齊家と治國と其範圍に於てこそ差異はあれ、其主義に於ては決して異なる所あるべきの理なしと、荀子に於ても亦然り。秦昭王嘗て荀卿に問ふに儒の國に益無きを以てするや、彼答へて曰く、儒者は先王を法り、禮義を隆め、臣子を謹しめ、其上を尊べしむる者也と、又曰く國に禮なければ正しからず、禮は國を正す所以也、之を譬ふれば猶衡の輕重に於けるが如く繩墨の曲直に於けるが如く規矩の方圓に於けるが如き也と。彼は倫理に於て尊

禮の形式主義を執りしと同じく政治に於ても隆禮の形式主義を執れり。孔子禮樂を尊び孟子仁義を唱ふ。荀子の隆禮主義は孔子の主義を傳へて孟子と其半を頌てり。即ち彼れは孔子の學說中嚴格なる形式的分子を傳ふるものにして、孟子は稍溫和なる理想的分子を傳ふるものと云ふべし。孟子が動もすれば理想に走りて實際に遠かり、荀子が形式に拘泥みて時に固陋峻刻に失するの傾きあるは之が爲めなり。孔子家語に孔子の言として記して曰く我れ性の善なるを云はんと欲す然れども人の善に放任して惡たらんことを恐る、我れ性の惡を云はんと欲す然れども人皆仁義を以て性を害すとなし之を爲さざらんことを恐ると此書素より僞作なりとは學者の定論なれども、或は孔子の意を得たるものなるが如し。是によりて之を見れば、孟子の性善說と荀子の性惡說との由來も知るに難からざると共に政治上に於ける理想主義と形式主義の由來も推理によりて其根ざす所を知るに難からじ、之を要するに、孟子と荀子とは同母異性の兄弟なり、各母子の相傳性質の半を頌ちて其特長を發揮せしかども未だ其全きを傳ふる能はざりしなり。孟荀を打して一丸となし、之を融合し調和し更に之を秩序的に組織せば或は孔子以上のもを得むが、然れども之を各にしては、後世或は孔孟と稱し、孟荀と云ふと雖ども共に未だ孔子と肩比するに足らざるや言を俟たず。畢竟荀子は孔子の子にして孟子と兄弟たり、其相爭ふは恰も之れ兄弟牆に闔くの類にして墨楊老宋に對するや、其攻撃の鋒先を同じくする見る。

扱ても荀子の政治上の主義が倫理に於けるが如く禮にあることは前述の如くなるがこれ亦其根本を例の性惡說に建てたり。彼謂へらく人の生るゝや群無き能はず、群して分つ無くむば則ち爭ふ、爭

へば則ち亂る、亂るれば則ち窮す、故に分無きは人の大害なり、分あるは天下の本利なり、而して人君たる者は分を管する所以の樞要なりと、茲に所謂分とは上下貴賤長幼貧富の分なり、而して貴賤等ありて相犯さず、長幼差ありて相譲り、貧富輕重皆各其稱ある者之れ荀子の所謂禮とする所なり。人の性惡なり、性惡の人群居して社會を成す、之を自然に放棄せば爭亂俱發、擾々として治む可からざるに到らむ。須らく禮を以て之を束縛し、之を拘緊し、各其分を守らしめ、其職を勵ましめ、以て社會の治安を保つ可き也とは、之れ荀子が政治上に於ける隆禮主義の根本思想なり。故に曰く必將さに禮を修めて以て朝を齊へ、法を正して以て官を齊へ、政を正して以て民を齊へ、然る後節奏朝に齊ひ、百事官に齊ひ、衆庶下に齊ふ、是の如くなばれ則ち近き者親を競ひ、遠方願を致さん。上下心を一にし三軍力を同くせば、名聲以て之を暴炎するに足る、威強以て之を擁答するに足る、拱揖指揮して強暴の國趨使せざる莫しと、之れ荀子の理想とする所なり。要は分ちて之をににするに在り、換言すれば分業の獎勵なり、百技の成す所僅かに一人を養ふ所以、而かも一人にして百技を兼ねるは到底出來得べからざる事なり、茲に於てか分業の必要起る。而して分業は社會的團結力を鞏固ならしむるものなり。荀子茲に見る所ありて大に分業の必要を説けり。西洋に於ては漸く十八世紀に到りてアダムスミスによりて分業論を聞くを得たりといふ。然れども支那にありては荀子既に業に之を唱導せり。蓋し卓見といふ可し。今其所説の一般を紹介せんか、富國篇に曰く

萬物同宇而異體。無宜而有用。

と楊倞之に注して曰く

雖於人無常定之宜、皆有可用人之理、必在理得其道使之不爭、然後可以富國也。

と、これによりて見るに、萬人等しく生を此宇宙に受くと雖も各其体を同じくせず、業に適不適あり、事に宜不宜あり、或は相たるの器を抱く者あらん或は士大夫たるの材を有する者もあらん、或は吏たる者、或は農たる者、或は工たる者、商たるもの、上は天子諸侯より下は抱關擊柝の輩に到る迄、各々其材を異にし其器を異にす、而かも必ず用ふる處あり、天下未だ一人も不用の人あることなしとは、是れ彼が分業論の根據なり、而して是れ又彼が政論中最も重要な部分に屬す。彼は更に一步を進めて論じて曰く

欲惡同物、欲多而物寡、寡則必爭矣。故百技所成所以養一人也、而能不能兼技、人不能兼官、離居不相待則窮、羣而無分則爭、窮者患也、爭者禍也、救患除禍則莫若明分使羣矣。

情性に溺るゝは人の免る能はざる所なり、従つて勞役の事を惡み、功利をのみ欲するはこれ人情の自然なり。是の如くむば事を樹つるの患と、功を爭ふの禍と終に又免る能はざらんとす。所謂分を明かにするの必要隨つて生ず。荀子更に歩を進めて精神的の勞働と肉体的の勞働との分業を論じて曰く

君子以德、小人以力、力者德之役也、百姓之力待之而後功。

と、更に其分を細論して曰く

刺草殖穀、多糞肥田、是農夫之事也。守時力民、進事長功、和齊百姓、使人不偷、是將率之事也。高者不早、下者不水、寒暑和節、而五穀以時孰、是天下之事也。若夫兼而覆之、兼而愛之、

兼而制之、歲雖凶敗水旱、使百姓無凍餒、則是聖君賢相之事也、

と而して彼が分業論は政治上に於て最も明瞭に云ひ表はされたり。王霸篇に曰く

治國者、分己定、則主相臣下百吏、各謹其所聞、不務聽其所不聞、各謹其所見、不務見其所不

見、所聞所見誠以齊矣、則雖幽閒隱辟、百姓莫敢不敬分安制以禮化其上、是治國之徵也。

各其職を守りて敢て他を犯さず、各其聞く所を謹み其見る所を謹み其聞かざる所を聽くを務めず、
見る所を見るを務めず。此の如くにして始めて秩序整然紀綱振肅せん。荀子の此語豈に政治學上
に於ける千古の名言にあらずや。荀子は茲に孔子の言を引きて其説を確めたり曰く

知者之知固以多矣、有以守少、能無察乎。愚者之知固以少矣、有以守多、能無狂乎。

以上は荀子の分業論の一般なり。此外荀子の政治論中注意すべきものを論相及び後王の説の二とす。
當時墨子の説天下に行はれて、君主勞役の説を唱へ、又古來の慣例として天子自ら政を執るの風行は
れたれば、荀子は此説の誤れるを論して君主の職は一相を論するに在りと爲せり。其説に曰く人主
は人を官するを以て能となす者なり、匹夫は自ら能くするを以て能と爲す者なり。人主は人をして
之を爲さしむるを得、匹夫は則ち之を移す所なし、百畝一守、事業窮す、之を移す所なき也。今一
人を以て天下を兼聽し、日に余ありて、治不足なるもの人をして之を爲さしむれば也。大は天下を
有ち小は一國を有ち、必ず自ら之を爲して而して後可ならば則ち勞苦耗頓之より甚しきは莫し、是
の如くなれば臧獲と雖も天子と勢業を易ふるを肯せざらん。是を以て天下を縣し、四海を一にする
何ぞ必しも自ら爲む、之を爲すものは役夫の道なり、墨子の説なり。徳を論じ能を使うて之に官を

與ふる者聖王の道なり。儒の謹守あり。是れ君主專制を批難して信任を基礎とせる立憲政治の制を主張せるものに非ずや。君主の職は一相を信任して臣下百吏を兼率せしむるに在りて貫目にして治詳し一日にして之を曲列するが如きは、人主自ら爲すの職にあらず、百吏官人をして爲さしむる所也と論せる如きは、孟子が徒らに仁義を説き屢々迂遠の説を爲しに比して何ぞ其見識の卓拔せるや。然れ共支那人の孔孟に心酔して理想に趨するの性質は此荀子の卓説をも容るゝ能はず。二千年の昔に於て萌芽せる立憲政治の蕾は終に其絢爛なる美花を開くに至らずして止みき。惜しむ可き哉。又後王の説は荀子の政治論中に於ける卓説の一なり。後王の説とは何ぞや儒効篇に曰く

逢衣淺帶、解果其冠、略法先王而足亂世術、繆學雜舉、不知法後王而一制度、不知隆禮義而殺詩書

と、孔孟其他一般の儒者が堯舜禹湯文武を祖述するに反して、荀子は政は後王に法るべしと稱導せり。凡そ上古崇拜の癖は支那人の頭腦に深く浸染せる所にして上古の事とし云へば何事も金甌無缺の良法なりと思ひし、上古なる名稱の前には凡ての判斷力を失ふを常とす。されば上古に復るを以て政治の要目とせしは孔子既に然り、孟子素より然り、老子然り、墨氏然り、他の碌々たる末輩に至りては雷同附和して一齊に上古萬歳を謳歌する中にありて、荀子は獨り毅然として俗流の外に立ち「畧法先王亂世術」と絶叫す。萬綠叢中紅一點とは眞に這般の光景に非ずや。凡そ上古に在りては其民朴にして質、智未だ開けず、惡人未だ多からず、従つて其法や簡單にして能く維民を治むるに足れり。然れども、世進み人智開くるに従つて上古の簡單なる法律制度は進歩せる人民を律するに足らずし

て自ら繁褥となり、繁褥となるに従つて人民は之を厭ひて、上古の簡に復らむことを希ふ。而かも其繁褥は時勢變遷の結果なるを知らず、乃ち上古を懐悦し古人を謳歌す、俗人俗儒之に附和して世俗に媚び、妄りに上古を引き時に合せざる制度を設けて世術を亂る、之れ豈に剛直なる荀卿の堪ふる所ならんや。上古は上古の制を以て之を治む可し、今日の制度は最も進歩せる後王の法に則らざる可からずとは彼の持論にして荀子中諸處に散見する所なり。

之を要するに荀子の政見は禮を隆うし、賢を容れ、後王の制に法りて其人を齊ふるに在り。其人にして苟くも一ならんか其土地且奚ぞ我を去りて他に行かんとは彼の所信なり。これによりて之れを見るに孔孟が仁義禮樂によりて民を心服せしめんことを説きしに反して、彼は所謂禮なる形式的手段により人民を齊一にし、且つ富國の策を講じ寧ろ實力を以つて天下を威服せん説きたるも、如し。彼は五常中の禮を以て已の主義の本尊と爲せりと雖も、其所謂禮なるものは、孔孟の所謂禮とは多少其趣を異にせることは前條中に於て述べたるが如し。即ち彼の政治論は既に孔孟の道德的政治主義を離れて、一步を實際的法治主義の圈内に踏み込める者と云ふ可し。孟子は常に理想に趨りて堯舜の至治を唱へ、直ちに之を當時に應用せんとせり、故に孔子も管仲の如き覇者を稍々認許せるに關らず、彼は全然覇者を排斥せり。然れ共其荀子に在りては必ずしも覇者を排斥せず、曰く義立而王、信立而覇と、稍々覇者を承認せりと云ふ可し。彼が覇者に對する意見は王霸篇に詳説せり、曰く、

德雖未至也、義雖未濟也、然而天下之理畧奏矣。刑賞已諾、信乎天下矣、臣下曉然皆知其可要

也。政令已陳、雖觀利敗、不欺其民。結約已定、雖觀利敗、不欺其與。如是則兵野城固、敵國畏之。國一暴明、與國信之。雖在僻陋之國、威動天下、五伯是也。

三十

されば荀子は覇を以て政治の極致とは爲さずと雖も、決して排斥せしに非ざるを知に足らん。畢竟彼は孟子の道德政治主義と韓非子の形名法術との中間に位するものにして、寧ろ吾人は荀子を以て韓子等の先驅と爲すを適當と信する者也。孔門の流を汲める荀子が形名法術の雄鎮たる韓非子の先驅なりとは信す可からざるが如しと雖も、固陋峻嚴に傾ける性惡説と、形式的に流るゝ傾向ある隆禮とが一轉して形名法術となるは、寧ろ自然の趨勢にして、あながちに信す可からざる事にも非ざるか如し。余や未だ韓非子を能く知る者に非らず。従つて其何れの學説が荀子の何處より胚胎せるかを明示する能はずと雖も、荀韓は師弟の關係もあり、且つ學説上以上の理由によりてかく信する者なり。果して當れるや否や、大方識者の教示を待つ。

以上は荀子が倫理及び政治上に抱ける主義の概要なり。素より其詳に在りては是に盡くるにあらずれども、要は此外に出でざるべし。されば余は茲にくだしく其詳説を爲すを止めて、最後に彼が文辭を批評して此篇を終らんとす。

荀子孟子の後に生れ、最も戰國の老師たり、學深くして禮に精しく、一世を瞬視して撥亂興理を以て畢生の事業とす、其十二子を非するや、意氣頗る軒昂、筆鋒殆ど當るべからざるものあり。它葛魏牟を嘗りては禽獸の行以て文に合し治に通するに足らずとなし。陳仲史鮑を嘗りては人に分異するを以て高きとなし以て大衆に合し大分を明にするに足らずと爲し。墨翟宋鉞を嘗りては辯異を容れ

君臣を縣つるに足らずとなし。慎到田駢を嘗りては、偶然歸宿する所なく以て國を經し分を定むるに足らずとなし。惠施鄧析を嘗りては怪説を治め琦辭を遊び、甚察にして不惠、辨じて用無く事多くして功寡く以て治の綱紀と爲すに足らずと爲し。更に子思孟軻を嘗りては畧先王に法りて其統を知らずと叫び、甚だ僻遠にして類無く、幽隱にして説なく、閉約にして解なしとなす。縦横四面に當りて傍若無人の境を行くが如し。或は禹行して舜趨す是れ子張氏の賤儒なりと云ひ、或は其衣冠を正し其顔色を齊くし、嚙然として終日言はす是れ子夏氏の賤儒なりと叫び、廉恥なく飲食を奢み、必ず曰く君子固より力を用ひずと、是子遊氏の賤儒なりと嘗り、或は偷儒、或は賤儒、或は奢儒、彼は實にあらゆる惡評を連ねて當時の儒者學者を嘗倒せり。議論時に偏することありと雖も、其頑健にして固執、憤世嘲俗の氣發して沸々の怒聲となるの狀今尙眼前に髣髴たるの感なくんばあらず。彼既に身を高く一世に標置して眼中未だ孟なく老なく宗なく慎なく墨なし、從つて其文辭亦自ら超俗の氣ありて慨世嘲俗の調を帶ぶる者多し。彼は學者なりき、然れども琦辭を遊び詭辨を弄し、妄りに世を瞞着せんとするは彼の甚しく忌み嫌ふ所なりき。正名篇に於て折辭作名以て正名を亂る者を以て大姦と爲し、其罪猶は符節度量を爲るの罪の如しと論じ、又單名複名の別を説きて名辭の周到不周到を論じ、更に名辭のツーフオールドミーニングを嚴禁せる如きは彼が論理説とも見るべきものにして、又以て彼が如何に當時の所謂客なるものが堅白異同、白馬非馬の如き詭辭を弄して諸國を遊説し虚名を一時に博せんするを排斥せしかを知るに足らん。彼の詞藻は富博なりき。然れ共彼は老莊の如き理想に耽りて、架空馮虛の説を爲すは彼の極めて好まざる所なりき。されば其比喻引證の

如きも極めて卑近に執りて、而も剴切適當を旨としたり。新奇を衍ひ、高遠に失するは彼の甚た忌む所にして、明確なる印象を讀者の腦中に刻まんとするは彼の比喩を用ふる點に於て最も苦心せし所、孟子や抑揚振翮の辭に達したりと雖も、比喩に於ては荀子に及はざること遠く、孔子や比喩を以て人を諭すに巧ならずとせず、然れども滔々百喩口を衝て出づる荀子の伎倆には及ぶ可からず。莊子に到りては巧に過ぎて實用に遠かり、却りて論旨を空漠ならしむる傾あるは、荀子の取る所に在らず。韓非子の比喩に巧みなりといふも蓋し師承する所あるが。今荀子勸學篇一篇中に於ける比喩四五を拔出して如何に彼が比喩に巧みなるかを見むとす。

青取之於藍而青於藍。氷水爲之而寒於水。

不登高山不知天之高也。不臨深谿不知地之厚也。不聞先王之遺言不知學問之大也。

登高而招、臂非加長也、而見者遠。順風而呼、聲非加疾也、而聞者彰(中暑)君子生非異也、善假於物也。

蓬生麻中、不扶而直。蘭槐之根是爲芷、其漸之滫、君子不近、庶人不服、其質非不美也、所漸然也。

蟹六跪而二螯、非蛇蟻之穴無可寄託者、用心躁也。

小人之學也、入乎耳、出乎口、口耳之間則四寸耳、曷足以美七尺之軀哉。

不道禮憲、以詩書爲之、譬之猶以指測河也、以戈春黍也、以錐殲壺也、不可以得之矣。

是の如きは、勸學篇中に於ける主要なるものゝみ。悉く之を抽出せば、到底枚舉に遑あらざらん。

況んや荀子三十二篇中のものをや。彼は比喻に於てかく力を盡せし如く、一般の修辭に於て頗る苦心せり。荀子以前の儒者は修辭に重きを置かすして、専ら力を已が學說の表彰に勉めて、文を巧みにするが如き点に於ては、深く頓着せざりしものゝ如し。たゞ文學者たるの天資は彼等の文章をして文學的價值あるものたらしめしものゝ如し。されば此時代より以前の書は多く問答体を用ひて、言一文致するもの多し。荀子は此問答を用ふることを甚だ少く専ら文章として之が修辭に力を用ひし痕跡あり。言文相分るゝに至りしは蓋し此荀子の時代に在らん。

荀子既に修辭に意あり。學の博と筆の健を以てす。其文章の富麗時に目を驚かすものあるや怪しむに足らず。之を要するに彼の思想や極めて健溫實着なりしに拘らず、彼の文章は甚だ贅澤に裝飾せられたり。句を鍊り章を鍛ひ、重句を濫用して無用の辨を費し、爲めに動もすれば冗漫に流れむとするは彼の文章の一大缺點なり。は健筆家なり而れども達筆家にあらず。其局部の美は則ちありと雖も、文章の美としては、彼が殊更らに修辭に意を用ひし丈け、不自然の點多くして、之を論語に比すれば、是れに美菓釀々の富麗はありと雖も、彼の寸鉄殺人的簡勁なし。是を孟子に比すれば、彼には雄風颯爽の霸氣ありて、是れは嘲聲啼々の頰調あると共に、彼に是の富麗辨博の美なく、是に彼の抑揚轉折の妙なし。彼は才子なり是は學者なり。彼は達弁にして是は多言なり。彼は理想に趨りたるを以て活働せり、從つて活氣あり、是は實際に拘泥したるを以て突飛の活働を爲さず從ふて生氣の勃々たるを見る能はず。二家の優劣容易に判す可からずと雖ども、世人動すれば孟子の文の

荀子のそれに勝れりとなすは以上の理に由るなり。余も學者を以てすれば孟子到底荀子に及ばずと雖も、又文章家を以てすれば、荀子終に一步を孟子に譲らざるを得ずと信するものなり。

以上論する所を一括するに、荀子はその學問の系統を孔子に受くと雖も、其學說の根據は客觀的實際世界に在りて主觀的抽象議論を喜ばず。性惡の説を立て、勸學の根本問題を定め、倫理政治共に尊禮の形式主義を執りて、形名法術の源を作り、其文辭は比喻に富み富麗辨博なりと雖も、生氣に乏しく、冗漫に流るゝの弊あり。一言以て之を掩へば、彼は學者なり活動の人にあらずと、是れ余が荀子に對する管見の概略なり。學課勿忙の際觀察の蕪雜粗笨に如ふるに行文の拙劣を以てす、罪を諸兄に負ふこと大なり。幸に叱正の勞を惜むなくむば幸更に甚し。

